
二人に分かれた長門有希

初心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人に分かれた長門有希

【NNコード】

N1362W

【作者名】

初心者

【あらすじ】

キャラ崩壊しているはずなので過度な期待はしないでください。

<http://twitter.jp/user/OTEARAI/follow>

で更新ツイートもしています。

第1話

俺は今部屋の前にいる、もちろんノックをして入るつもりだ。

なぜなら朝比奈さんのお着替え中に入るなどと嬉しいハプニングを見ないようにしているからだ。

見ようものならハルヒが延々と語り出し朝比奈さんは悲鳴を上げるなど俺に困った状況を『ええでしまうからだ。

まあそこいらの思春期男子たちはたとえハルヒに言われてもあの朝比奈さんの着替えを優先するだらうが俺はちゃんと自重するのだ。

まあ長話は置いといてドアを叩くとこよつ。

ノック

ドアが当たり前な音を出す。

「どうぞ」

中から返事がする。

ああ長門がいるんだと確信して中には朝比奈さんはないとも確信できた。

ガチャッ

そういえば長門が「どうぞ」なんて言つたことがあったつけ？

そんな疑問を解決するために部室に入る俺こと別名キヨンは部室にいる人物を見た。

長門有希

超万能な宇宙人端末、情報統合思念体によつてつぶられたコンタクト用・・・まあそんな細かいことはいい。

「長門・・・」

部室の右側の窓の近くにいすを置いてそこで本を観てている。

それだけならまだいい問題はこいつちだ。

部室の左側の窓の近くにいすを置いてそこで小さくなっている人物だ。

その人物は眼鏡をかけていて反対側に座っている人物をかなり警戒している。

そして俺を観るなりさらにも小さくなっていた。

これはいつたいなにが起きたんだ？

「長門説明してくれ」

俺が尋ねると右側に座っていた長門が語り出した。

ようするにだ、ハルヒのせいらしい。

俺は何か言わなければならぬと思ひ左側にいる長門に近づく。

「えつとだな・・・・俺を知つてゐるか?」

いつぞやの長門に質問したよつた單語がでてきた。

長門は小さな声で「知つてゐる」とだけ叫つた。

「俺もおまえのことを多少知つてゐるんだ、図書館のとわだよな?」

長門は俺を見つめる。

「うん」

小さな声で長門は言ひや。

どちらも俺が知つてゐる長門有希だからだ。

どちらも俺が知つてゐる長門有希だからだ。

とつあえずだまづは長門に聞く必要がある。

「長門一人暮らしだよな?」

「「うん」」

本人同士なので返事も同じ双子かおまえ等は。

「これからどうするんだ?」

「問題ない一人で使えばいい」

簡単でなによりつていいのかそれで?」

「えつ?」

片方の長門は混乱しているようだ。

当然だわ自分のそつくりさんがまさか自分の部屋に入るんだからな。

「長門」「はなに部だ?」

「SOS団」

「文芸部」

あちゃーやつちまた。

確かにどちらの長門も本を観ているから文芸部だと思つても不思議じゃない。

バンッ

部室の扉が力強くあけられた。

ついに現れた我らが団長涼宮ハルヒ、あらゆる問題の中心人物あのときの長門を狂わせた張本人。

「有希あなた双子がいたのね」

「そう双子」

長門が言ひと左の長門がさらに混乱する。

「まあ団員の家族なら歓迎よ名前は？」

長門は恥ずかしそうな顔をして小さく言つた。

「長門有希」

「へえ名前も同じなの？さすが双子ね」

右にいる長門が俺を見つめる。

わかつてゐるが、あとでだる。

長門は俺のアイコンタクトを理解して本に視線を戻した。

第2話

時間は少し流れ俺は長門のマンションへやつてきた。

二人の長門がお茶をいれるものを取り合っていたのを笑いをこらえてみていたがどうやら眼鏡無しのほうに軍配があがつたようだ。

長門がお茶を用意している間俺ともう一人の長門と二人きりとなつた。

とりあえずだこの長門はどうと探りを入れてみる。

「えーと、入部届けってどうした？」

長門の顔に涙が浮かんでいた。

ああハルビがいなくなつたときのか・・・・・。

つまりだこの長門は俺がエンターキーを押すまでいたあの長門だ。

エラーが発生した長門が作つた世界。

たつた一人の文芸部員で本好きの内気な少女で今の長門より感情が豊かな長門。

「あのあと部員は増えたのか？」

「えつ？あなたがおかしくなつてから私はもう一人の私のそばにいた

なんとこ「ひ」とだの世界は俺がエンターキーを押してから止まつているみたいだ。

長門がお茶を持ってきた。

お茶を三人分いれて置く。

とりあえず一杯ああ

「おいしい？」

「ああ」

「私と似ている」

もう一人の長門も不思議がつていて

「私はあなた、あなたは私」

もう一人の長門は首を傾げている。

わかつてゐるセ「ひ」ちの長門はそんなに簡単にいえないのは知つていたさ。

「まあなんだ、長門、おまえは長門有希、こつちも長門有希つてことだ」

我ながら下手な説明だと思つたが眼鏡の長門は「そつ」と言つてくれた。理解したのだろうか？

さて今はまだでもいい今は長門の説明を聽いて。

「涼宮ハルヒの発言がトリガーとなつて今回のことが起きたと考えられる」

思ひ過たる節が多くあるぜ。

ハルヒはときどき長門がなにを考えているのかわからぬことばかりしていた。

つまりだ長門が感情豊かになつて欲しいとかわかりやすいようになりたいとか望んだらしく。

しかし困つたことになつた。

もう一人の長門と再会していつかはまたよならしなければならぬいそのときまた俺は長門を泣かせてしまつ。

あれはつら。

どうしたものか。

「どうすればいい?」

「私の力でこの娘を消す

うん、断固反対だ。

「私が感情豊かになる」

うん、無理だ。

もう一人の長門だって時間をかけなければならないのにこちらの長門がおいそれと感情豊かになるわけがない……見てみたいが。

別れるとおまでこる」とこじょ。

もう一人の長門はうなずいた。

さて最初の用件は終わった。

次は呼び方だ。

「長門」

俺が呼ぶと一人が俺を見る。

やはり区別する必要があるな。

「えーとだ、俺は混乱しないように呼び方を変えようと思つ。そこで長門有希を分けて長門と有希にする」

長門がしゃべりだす。

「私が有希である娘は長門すべき」

それにもう一人の長門が反論する。

「有希は私……」

小さくなりながらも意見を言つもう一人の長門。

ここにハルヒがいたら萌えとか言つんだらうがな。

「「あなたが決めて」」

結局俺が決めるのか?

失敗だつた少し恥ずかしい。

有希有希有希有希やべえ恥ずかしい。

ハルヒなら普通に言えるのにな、なぜか長門には恥ずかしいぞ。

ここは・・・・・

「二人で話し合え」

逃げだ完全に逃げだ。

俺はぬるくなつたお茶を飲み干し長門の家を後にした。

後はまかせた。

一波乱がまた始まるんだな。

俺はそう予感した。

第3話（前書き）

ツイッターでも更新情報を流しています
<http://twt.jp/user/OTEARAI/follow>

第3話

俺はめざりしく朝早くに高校へやつてきた。

だが教室には行かずまつすぐひの団の部屋にやつてきた。

案の定、部室には一人の長門がいた。

「結論からいう私が有希」

と眼鏡無し。

「わつ私が長門・・・

と眼鏡あり。

「わかつた」

そういえばわからなことがもう一つ。

「有希」

有希がなぜか俺を見返す。

そこにはなにかうれしさを感じた。

「なに?」

「長門はどこのクラスだ?」

「そつ長門」のクラスだ。

「彼女は私だからどちらかが行けばいい」

「あんなのは二入つて便利だなあ。」

「便利ではないこの世界の私と同じように振る舞わなければならぬから」

そつか大変なんだな。

「長門、とりあえずはこの部屋についてくれ」

長門は小さくうなずいた。

ちよくちよく顔を出してやれば寂しくないだろ？。

やーて次はハルヒか。

ハルヒが望んで出てきた長門をハルヒはどう思つてこらのだらう。

「ハルヒ」

「なによキヨン」

「昨日のことなんだが・・・」

「あの娘もこの団に入れるわ」

おこおい、いきなり団員にしゃがつたやうの団長は。

まあ俺もそのつもりだったから勧誘しようつゝと誘おつとしたわけだが取り越し苦労だったな。

「あの娘有希の家族なんでしょう? これなら資格があるじゃない」

まあ宇宙人の有希に地球人の長門だからなネタにしては完璧すぎるな。

「と詰つわけであなたもひの団の一員よ」

パチパチパチ

とりあえず団員全員から拍手をもひつた長門は断るはずもなく入団した。

でそのお祝いと詰つわけで喫茶店にいるのだが。

まあ同じ長門有希だもんな。

食べる食べる二人の長門有希は出されたものを次々に食べていく。

俺たちはそれを唖然と見ていたがハルヒの一言で俺は驚愕する。

「今日はキヨンのおじりつね」

そりゃないぜ。

で解散した。

といつあえず明日谷口アート「アーティストのアート」
といつあえず明田谷口アート「アーティストのアート」

いつかの長門有希の評価を改めるためにな。

といつあえず寝る。

第4話（前書き）

おもしろいのか疑問を持っている作者です
<http://wtr.jp/user/OTEARAII/follow>

毎朝恒例のハルヒとの雑談を終わらせ教師の念仏をどうにか頭にたたき込んでようやく昼休みだ。

俺は弁当を持って部室に行けり立ち上がったときだつた。

「キラーン女子がおまえによつがあるじこぞ」

と教室全体に言われて声の主の方を向くと声の主と長門がいた。

長門は頬を染めて下を向いていた。

俺は弁当を持って冷やかすクラスメートをやりすゞして長門の元へ向かう。

「どうしたんだ？」

聞いたが長門の返答を待つ前に俺は長門の手に弁当があつたのを見逃さなかつた。

なるほど、お皿を一緒にか？

俺は長門が言ひ前に答えた。

長門は顔を上げて小さく頷いた。

とりあえず移動を始めないと野次馬が集まりそつだ。

「こべか

俺と長門は並んで歩き出した。

途中でハルヒと会合わなかつたので安心した。

場所はこつもの部屋だ。

部屋には先客がいた。

「有希

有希は俺たちをみた。

有希も弁当を持ってきていた。

とつあえず団員席に座り弁当を広げる。

長門は俺の向かいに座り広げる。

有希は最初からいたの長門の隣を使っていた。

それにも静かな昼食だな。

元々長門も有希もあまりしゃべるタイプではないはずだ。

俺はいつわいつ長門のお皿をのぞく。

「サンディッシュか

いきなり聞かれたのか長門は小さくうなづいた。

わかりやすい

「つべつた

「私と一緒に」

長門の後に有希が言つた。

「たくさんあるな

長門有希の腹袋が少し心配だが気にしないことにしておけ。

すると俺の皿の前にサンドイッチがでてきた。

「どうぞ」

長門がサンドイッチをくれた。

「ああああ

俺も弁当を見て我が母が作った唐揚げを差し出す。

「サンドイッチの礼だ」

長門は唐揚げを受け取ると口にいた。

「おこしー

長門が少し表情をゆるめていた。

「私にも」

有希が俺に言つてきた。

有希がおねだりとはあまり記憶にない。

俺は有希に唐揚げを差し出す。

「ありがとつ

有希の返事に悪い気はしなかつた。

有希は唐揚げを口にいれて動かす。

「庶民的な味」

褒め言葉だらうか？

ただ有希が少しずつ変わってきてることに俺は嬉しい。

いつか有希も長門のような表情をしてくれるだらうか？

長門も明るくなるだらうか？

おっとそろそろ休みが終わるな。

俺は平らげた弁当を片づけて一人より先に部室を後にした。

教室に戻るとハルヒが妙に機嫌が悪かった。

「どうしたんだ？ 腹こわしたか？」

「あなたお腹どいたのよ」

「部屋だ」

「あら意外にまじめじゃない、いつもまじめならここに」

「そうかい。」

「ねえキヨン明日なんだけど」

「どうした？」

「私とお皿を食べない」

「ハルヒとお皿かたまにわいいだろ？」

「いいぜ、明日な」

「ハルヒは明るくなつた。」

古泉はハルヒが機嫌がいいのを喜んでいた。

「閉鎖空間が発生しないだけ嬉しいですよ」

と言つていた。

ハルヒの弁当を捨んでも大丈夫だろうと俺は一々やついていた。

第5話（前書き）

キャラ崩壊してるよね？それも覚悟の上ぢ
http://t
wtr.jp/user/OTEARAI/follow

ハルヒとの軽食イベントをこなしあつところに、ついでに休日となつた。

今日はMOSAIC恒例の不思議探索の日だ。

ハルヒがいつものようにくじ引きでパートナーを選ぶ。

今回から長門が加わつて、3対3となるわけだが・・・・・。

結局、俺と有希と長門となつた。

「ちやんと見つけてきなさい」

ハルヒのわがままを聞き流し俺たちは出発した。

「どこにいきたい？」

ふと一人に尋ねたのだが、一人とも行き先は同じようだ。

結論、図書館だ。

「それじゃあハルヒに呼ばれるまではこの中で自由にじよつせん

二人はフラフラと歩きだした。

さすがに宇宙人とふつうの人間だと読む本のジャンルは違つようだ。

俺は適当なマンガをチョイスしておく。

pr
r
r
r
r
!

うわつ

明らかに周りに迷惑な顔を崩してしまった。

着信だ

一いつたん集合「

不機嫌なハルヒの声をどうにか聞き流し眠たい頭をフル回転にして有希と長門を連れだし集合した。

十一

戻ってきて早々チーム入れ替えた。

まあなんだ」んな細み合わせとなつてしまつた。

俺は朝比奈さんと長門だ。

なんだ」れは・・・なかのイヴン・アカ?

俺の左右には朝比奈さんと鶴門が歩いている。

どこに座りませんか？

「 もうそうですね」

「 うん」

朝比奈さんと長門は俺の提案を了承した。

とつあえずベンチに座ろ。°

さて俺は朝比奈さんと長門に挟まれて座つて いるのだが悪い気はない。

そりこえは有希も長門も制服じゃなかつたな。

いつ以来だらうか私服の有希と長門、いや長門は初めてか。

「 キヨンくん、未来からはなにも来てません」

そりですか。

さすがの朝比奈さん大もこの事態にはお手上げなのか?

「 長門さん」

「 なに?」

一人はお互にビクビクしていた。

「 長門さんは好きな人はいるんですか?」

いきなりなにを言い出すんだこの未来人は、長門も考えるな。

一瞬長門が俺を見たような気がした。

「いない」

なぜかホッとした。

「できたら教えてくださいね」

「うん」

会話はそこで終わった。

そこでハルヒが戻る前に集合場所に戻りますか。

いち早く到着した俺たちだが後から着たハルヒの文句を聞いて解散した。

まったくこの団長は。

「キヨンくん今田は楽しかったよまた学校でね」

はい朝比奈さん。

長門が近くにいた。

「・・・・・あつまた図書館に・・・・一緒に・・・・

ああ約束だ。

長門の意思表示も新鮮味があつてたまらない。

「それじゃあ

有希と長門は行ってしまった。

俺も帰るか。

「なんですかー！？」

自転車が駐禁で持つて行かれていた。

はあやれやれだ。

第6話（前書き）

なんとなくできた

<http://twitter.jp/user/OTEARI/follow>

いつも私のホームページ

<http://hp.did.ne.jp/otearai/?ogid=ON&my=1>

第6話

不思議探索から数日後俺は長門に呼び出された。

「明日、家に来て」

長門は小さな声で俺に言った。

別に断る理由もないのでもOKした。

まあ有希もいるだろうし大丈夫だろ?。

SOS団の活動を終わらせ帰宅する。

明日は土曜日か。

そんなことを考えながら俺は夢の中へ意識をみわした。

・・・・・

俺は今かなり急いでいた。

何を隠そう俺は寝坊したのだ。

すまん長門もう少し待つてくれよ。

例の「とく長門」のマンションへきてボタンを押す。

「遅れですかん長門、俺だ」

防犯扉が開き俺はエレベーターに乗り込み上に上がる。

遅刻した俺を長門は責めることなくそれどころか来ててくれたことに喜んでいたようだつた。

それより俺には気がかりなことがあった。

有希がいない？

しかも長門は部屋着を着ていた。

いつもの見慣れた制服ではなく紛れもなく服だ。

健全な男子高校生と内気な読書女子高生。

なんだこれは？

長門・・・・・がんばったんだな。

俺は成長した子供を見る親の目で長門をみた。

まあ子供はいないが妹はいるぞ、うん。

長門と俺はいつもやの位置で座つている。

それにしてでも長門、田のやり場にいるんだ。

長門は正座をしていたが制服の時と同じような短いスカートは反則だ。

「…………似合つてゐる。」

俺の視線を感じたのか長門が訪ねてきた。

「ああ可愛いでこれで眼鏡がなかつたら最高だ」

これは本心だ、だが眼鏡がなくなると区別が付かないへんなつやうだ。

「お茶煎れてくる」

長門が立ち上がるとき一瞬だけ長門の脚を見てしまった。

ちよつとジキッとしてしまひ。

長門が歩くたびにヒラヒラと動くスカートを観察していくと不意に見えてしまうものもあるわけで。

まあなんだ女の子らしかったと感想を付けておひい。

お茶がでてきてゆつくつと味わいつ。

あー暖まる。

朝比奈さんと良い勝負するのではないだらうか？

「やつこえは俺を呼んだ理由つて？」

呼ばれたからには訪ねたくなることだ。

「…………」

長門は頬を赤くして下を向いてしまつた。

「一度でいいからテートしてみたくて」

小さな声で長門が告げる。

あんなのモードイングア派のテートね…………。

「トート?俺と?」

長門が小さくうなづく。

これはポイントが高いぞ。

まあさすがの長門もその服装で外には出たくないらしい。

俺もこの姿の長門を誰にも見せたくない。

ん?なぜだら?~まあいいや。

「長門、着替え?」

突然の俺の発言に長門は顔を上げた。

「えつ?」

「テートはインニアだと成立しないぜ。

長門が着替えるために立ち上がり部屋に入つていった。

しばらくするとスカートだけを穿き替えてきた。

スカートは先ほどより長い、だが似合っていた。

「よしつこくか

俺と長門は玄関から出て長門が鍵をかけたのを確認した。

長門の手を握る。

長門の頬がまた赤くなる。

「まあテートならな

俺と長門は手をつないでマンションから出ていった。

第7話（前書き）

文字数が異常に少ない

俺と長門は賑やかな公園へやつてきた。

「なにかのむか？」

長門は首を横に振った。

とりあえずベンチに腰掛けおそらく妹と同い年の人達が遊んでいるのをながめていた。

長門の顔は満更でもなさげだ。

するとひとりの子があれたちを見ていた。

「ひひひそんなに見ちゃ いけませ」

その子の親らしき女性が注意していた。

「じめんなさいね、せつかくのデートを邪魔して」

「どうやら恋人同士だと思われているらしい。」

「いえいえお気になさらず」

二人が去つて長門を見る

「俺たち恋人同士みたいって思われているみたいだな」

長門はしばらく黙っていた。

「移動するか？」

長門は小さく頷いた。

その後俺たちは行き先に困り果て図書館に逃げ込んだのは言つまでもない。

第8話（前書き）

今まで使っていたタイトルが消失のキャッシュコピーと判明したので
急遽変更しました。

日曜日、俺は何かをするわけもなく部屋のベッドで寝ころんでいたが少し外を歩きたくなつてきた。

「出かけてくる」

妹の連れてけコールを聞き流しそれぐと家をでた。

あーまさか妹はいつかハルヒみたいになるのではないかと懸念してしまうな。

「おーっ！」

見覚えのある後ろ姿があつた。

俺は走つて近づく。

振り返る人物それは・・・・・。

「有希じゃないかどうしたんだここんとこひどい

「なにもない」

有希の表情は確かに誰かにあつたために来たようにしか見えなかつた。

「一緒に歩いていいか？」

俺が聞くと有希は小さくなづいた。その表情はなんだか嬉しそうに見えた。

道を歩く俺と有希、そつこえぼまともに有希と歩いたのはいつ以来だつ?

「ここ入つてみないか?」

ファミレスだそろそろお腹だからな。

「奢つてやるよ好きなものを食べていいぞ」

有希はカレーライスを3杯食べた。

「おつかれさま」

ファミレスを出て俺と有希は昨日長門と来た図書館に入った。

そこで数時間過じし俺は有希のマンションにやつてきた。

有希に案内されて入ると長門がいた。

「おつかれりなさい……あつ

長門は有希に言つた後俺に気づいて顔を下に向けた。

「よつ長門」

長門は下を向いたままだった。

「伝えたいことがある」

有希は唐突に言った。

とりあえずいつものテーブルに長門と有希と向かい合った。

「涼宮ハルヒの力に変化が起きた」

なんだって？

「」のままだと私たち一人のうちじゅうかが消える

有希はいつものように告げた。

なんだつて？消える？なにを言つてているんだ有希？

「涼宮ハルヒの効力が消えてきている。涼宮ハルヒにとつて不用な
ほうが消える」

俺は呆然と有希の話を聞いていた。

「何か、何か方法は無いのか？第一どちらかが消えたら怪しまれる
だろ？」

「涼宮ハルヒはどちらかが消えても何も思わない。忘れてしまつか
ら」

なんてこつた、張本人が都合よく忘れるなんて世の中不公平すぎる
ぜ。

長門と有希の顔はよく似ている。どちらも本人だから、しかし表情
は長門は悲しい顔をしていて有希は無表情だ。

しかし俺にはわかる有希は消えたくない。

「何か方法は無いのか？」

「一つだけある」

教えてくれ有希・・・・・。

「効力が消える前に涼宮ハルヒと接触して一人の存在をこの世界に固定させればいい」

つまりだハルヒを説得して長門と有希を消さないように頼めばいいハルヒに自分の能力に気づかせることもなくだ。

簡単そうだ。

「失敗すればどちらかが消えるか最悪両方消えることになる」

俺としてはどちらも消えて欲しくない。

「わかった、あと効力が消えるのはいつだ?」

「一週間後の0時0分0秒に効力が消える」

「一週間!?!たつたそれだけか?

「とりあえずだ二人とも毎日部室に顔を出してくれまずはそこからだ」

こうして俺は長門と有希のために一週間奮闘することとなつた。

衝撃の事実が発覚して、俺は長門と有希を連れないとためにハルヒを説得しないといけないわけだが…………

「ちょっと聞こてるのキヨン?」

聞いてるとも、まあ右から左に流れではいるがな。

「まあいいわ

いいんなら別に言わなくてもよかつたよつた気がするがそこは言わないで置こう。まずはさわり程度に

「長門とまじうなんだ?」

「なにがよ?」

うかつだつたハルヒと有希と話すところなってあまり見たことがない。

「有希はねやっぱり無口キヤツなのよ

なこを言つ出すんだ」の図書館

「みくるみちゃんみたいに表情豊かにならなくち

朝比奈さんを張り合ひこだすな。

「とにかく有希には明るくなつてもらわなくちゃ」

いやいや有希は少しづつ変わってきたんだそれを気がつかずに二人にしてそれでさよならはないだろ。

「ハルヒ、一人いたほうがいいだろ？」

これで駄目なら手詰まりだ。

「わかんない」

ハルヒはそれだけを言つて黙つてしまつた。

放課後俺は有希に呼ばれマンションに向かつ。

「涼宮ハルヒが両方の存在を否定し始めた」

なつなんだと？

「事態は最悪に向かつてゐる」

「人が消えるのか？」

「そう」

「一体なにが起きた？」

「涼宮ハルヒに対し曖昧なことを告げた結果だと思われる」

すまん、俺はそれしか言えなかつた。

有希のマンションからびつやつて家についたのが全く覚えていない。今の俺には長門と有希のことしか考えていなかつた。

どうすればいい？

いつぞやのハルヒと閉じこめられた閉鎖空間でパソコン越しに有希に訪ねた内容だつた。

しかし、俺程度の頭ではやはりわからないことだらけだ。

有希・・・長門・・・。

起死回生のアイデアが思いつかない。

結局、一睡もできずに朝になつてしまつた。

学校へ向かい朝比奈さんに助けを求めた。

禁則事項です。

朝比奈さんはそれだけしか言わなかつた。

古泉、静観するしかない。

ただそれだけ・・・なんだ未来人も超能力者もなんも役にも立たない。

いつも助けてくれた有希・・・俺は・・・無力だ。
なにもできないままで最終日前日になってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1362w/>

二人に分かれた長門有希

2011年12月31日22時54分発行